

東京蜘蛛談話会通信 No. 86 (1996年2月4日)

編集・笹岡文雄 / 印刷・本紙 東京都豊島区 光プリンター

付録 池田尋明

* 1995年度採集観察会 *

*第4回(最終回) 2月18日(日) (雨天決行!)

場 所: 東京大学農学部 田無演習林

集 合: 西武池袋線「ひばりが丘」駅南口 10:00

西武バス ひばりが丘駅 ← (団地経由) → 武藏境駅 (路線番号 境04)

ひばりが丘駅 ← (団地経由) → 田無駅 (路線番号 田43)

「六角地蔵尊前」下車、当地入り口は停留所のすぐ前。

世話人・宮下 直 ☎0471-74-1612、笹岡文雄 ☎03-3918-1945

⇒ 1996年度の活動 ⇒

** 総会・例会案内 **

日時 4月28日(日): 目黒区駒場住区センター 10:00~

京王井の頭線「駒場東大前」下車 (目黒区駒場2-22-4 ☎03-3469-2613)

講演と総会および懇親会 → 世話人: 平松毅久 ☎0492-33-8792

* 同封のハガキにて出欠、近況(通信に掲載)を事務局平松まで

◎合宿予定(総会議案) 場所: 茨城県、日時: 8月3~5日、担当: 笹岡文雄

詳細は総会承認後、5月の「通信」にて

** 1996年度採集観察会 **

場 所: 神奈川県三浦市 小網代の森

第1回 5月19日(日) (雨天決行)

集 合: 京浜急行線「三崎口」駅改札口 10:00

世話人: 安田明雄 ☎045-641-0763

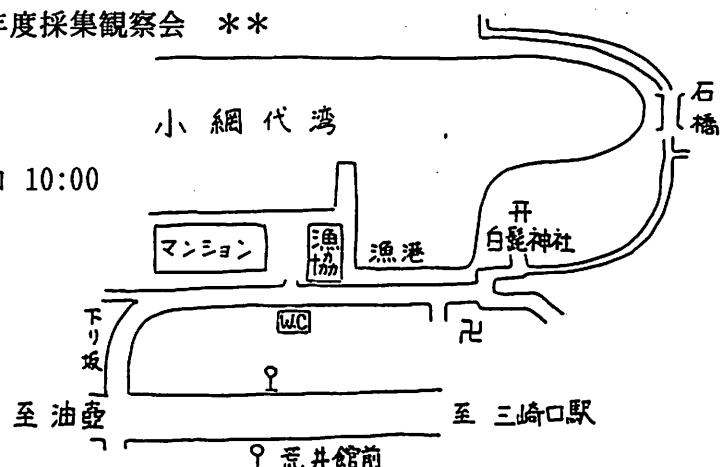
小網代の森へは京急バス「34」系統

油壺(マリンパーク)行きで「荒井館前」下車、

徒歩15分(地図参照)。採集観察は白髭

神社から石橋を通って小網代湾の対岸

までを予定しています。



	品 川	横 浜	久里浜	三崎口
特 急	8:37	→ 9:00	→ 9:41	→ 9:54
快速特急	8:48	→ 9:06	→ 9:40	

今後の予定

第2回 7月14日(日) 第3回 10月20日(日) 第4回 1997年2月23日(日)

* 東京蜘蛛談話会・多足類懇談会合同例会
開会挨拶 篠原圭三郎、閉会の辞 小峰光弘
司会 平松毅久、スライド 池田博明、金野晋

1995.12.3 10:15~17:30
晋

< 講演 >

1. 「ネコハエトリの闘争行動」鈴木 裕、安田明雄(斎藤克己・欠席)
2. 「キシノウエトタテはどこにいる・見つけ方関東編」 笹岡文雄 (スライド)
3. 「埼玉県のキシャヤヤステの分布について」桑原幸夫 (スライド)
4. 「金沢市でのオビババヤステ発生例」徳本 洋 (スライド)
5. 「日本のクモ テーニツツの足跡」篠原圭三郎 (VTR)
6. 「クモの網から餌を盗む動物たち」新海 明 (VTR)
7. 「都市林における造網性クモ類の種類、密度、体サイズ」宮下 直 (スライド)
8. 「西表島のクモ1995」谷川明雄 (スライド)
9. 「最近わかったハエトリグモの話題」池田博明 (スライド)
10. 「スイスとベトナムのはなし」小野展嗣 (スライド)

< 緊急ディスカッション >

「話題のセアカゴケグモについて」

'95年11月、セアカゴケグモの日本における分布が明らかになって、多くの情報が世間を駆け抜けました。私達もその情報に接するに付け、本来それはどうあるべきか考えさせられることが多くなりました。クモ学に携わる人間として、現状をこのままにしておくわけにいかない事態となりました。そこで合同例会の場を借りて討議を行ないました。

そしてその討議に先だっては、関西における現況を金野晋、日本の分布の推測を池田博明、全現状と種の概説を新海栄一、分類を小野展嗣の各氏によって報告と発表がなされました。

討議では現在マスコミを通じて流れている「毒グモ」という情報は、誇大であることについてほぼ一致しました。ただ理論的にはその毒は致死性があり、現実に死亡例も報告されています。その事実に対する扱いを、どうするかが一つ問題となりました。

そして、1. '56年以来、死亡例は一件もないこと 2. 殺虫剤散布はクモを根絶することはできず、他の有用な動物を殺してしまうこと 3. クモは人間にとつて有益であること 4. 豪州国民はこのクモに対して冷静に接していること 5. セアカゴケグモの正しい見分け方を伝え、情報提供を呼びかけること。これら5点の趣旨を中心に、アピールすることに決しました。

また会の性格を考え、この決議は日本蜘蛛学会を通じ、マスコミに対して何らかのアピールを出してもらうことを申し入れることになりました。

参加者 (50音順・敬称略)

赤羽尚夫、池田博明、梅林 力、大川秀治、緒方 和、小澤實樹、小野展嗣、
柿沼智子、笠原喜久男、加藤輝代子、加藤宏保、加藤むつみ、金野 晋、木村知之、
工藤泰恵、熊田憲一、熊田理恵、桑原幸夫、後藤好正、小峰光弘、 笹岡文雄、
佐々木祐子、貞元己良、佐藤英文、佐藤幸子、篠原圭三郎、新海 明、新海栄一、
鈴木 裕、高野光男、高橋 登、谷川明雄、千田高史、徳本 洋、浪波徳義、
新島溪子、西出知子、西出真理、西野洋一、萩野康則、萩本房枝、畠守有紀、
原山紀夫、伴 満、平松毅久、古浜 隆、前川隆敏、松本誠治、宮下 直、
安田明雄、吉澤美香、和仁道大

52名 ⇒ 総会・例会を通じて初の参加者「50名」突破!

時事川柳 ・ 大騒ぎ年が明けたらただのクモ

*近況つれづれ・南から北へ（例会出欠ハガキからの転載です・原文ママ）

☆木庭 奏（熊本県山鹿市）昨年の旱魃の影響が出た様で毎年ヒゴショウブにnetを張るチュウガタコガネの数は僅か3頭、葉を曲げて、産卵するササグモも僅か2～3頭でした。デンドロの置肥に集まるニクバエを捕えに沢山集まるササグモも4～5頭程しか、見られませんでした。池の囲りに網を張るアシナガグモの体長が短かいものが、小型の網を張り、2頭程しか見られませんでした。ただ温室内に今も2頭程住みついているのが、唯一の楽しみです。6月～9月にかけて、シマゴミグモ4頭が、シンビの葉と柵の間や柵を覆う（寒冷沙）網の柱の間に網を張って住みついてくれました。白帯の条件について、「風」との関係を考えていますので、ゴミグモ類が住みついてくれる丈でも大助かりです。我が家の周りの環境も変りつつの様です。

☆大熊千代子（福岡県福岡市）7月に新設の（北九州市立自然史博物館内の）クモ研究室は大分整ってきました。今時珍しくスペースに恵まれておりますので不用になりましたクモの標本などご寄贈いただけすると幸いです。不便な場所にありますが九州八幡の近くにお出のときはぜひ立寄って下さい。

☆鶴崎展巨（鳥取県鳥取市）昨年からはじまった千島列島の生物多様性に関する日米ロシア3国共同調査の一環で、中部千島列島（ウルップ島～ラシュア島）のクモを採集してきました。ロシアからはユーリ・マシルク、米国からはヴィンス・ロスというベテランが参加。8月の1ヶ月の調査で、中部千島のクモ相はかなりおさえたと思います。成果を期待して下さい。

☆東條 清（和歌山県海南市）至極健康で、いまイトグモの飼育と観察に熱中しております。イトグモの情報があれば教えていただきたく思っております。

☆田中穂積（大阪府富田林市）大学改革とかで、科目等、何かと忙しくおります。今年も欠席しますが、皆さんの活気を遠くから聞いています。

☆小笠原幸恵（愛知県名古屋市）”ある日のできごと”先日、私の勤める会社でのこと。なにげなしにふっと目をやった廊下のすみになにやら黒っぽいクモがころがっていました。よくよく見ると、ん？、キシノウエの介ちゃんか。なんでこんな所に??? それも、死んでいるわけではなく、生きたまま、あお向けにひっくり返っていました。ヘンなヤツ！この外にもシモフリヤチグモがふらふら歩いていたり、メガネヤチグモがトイレにはまっていたりする私の会社は都心から歩いて10分ほどの街のどまん中です。おもしろいでしょ。

☆緒方清人（愛知県知立市）1992年10月6日に熊本県荒尾市でイトグモの幼体を採集し、飼育しています。1995年10月6日で満3年になりました。何年生き続けるか楽しみにしています。

☆徳本 洋（石川県金沢市）11月の初めに、NHK-TVの「ふるさとの自然」という番組で、「アカシア林のジョロウグモ」という題の放映が全国に流されました。ジョロウグモが卵のうからぞろぞろ出てきて、第一次まどい、脱皮、第二次まどいを経て分散するところ、秋の雌の最終脱皮を待ち構えていた雄が交接をするクローズアップ、雌をめぐる雄の争いなどがメインシーンです。6月はじめ10日間、9月に3日間、金沢までハイビジョン大型中継車を東京から乗りつけ、スタッフ総勢11名という大規模な撮影で、驚きでした。それが朝の10分の放映なのです。毎朝6時半から夜10時までひっぱり出されて、無報酬というのも驚きました。しかしいろいろ勉強になりました。

☆後藤好正（神奈川県横浜市）最近片手間で横浜市のザトウムシも、採集しています。調査精度が悪い割りに種類がでました。

☆萩本房枝（神奈川県横浜市）相変わらず旅行が大好きで国内旅行ばかりですがうちこち旅行をしています。残念ながら最近は山に入ることが少なくなり、水族館やら動物園ばかりでまわりに合わせて観光旅行みたいなことしています。本当は自然を見るのが一番いいのになーと思うこのごろです。

☆水野陽介（神奈川県横浜市）試験などで、観察ができませんが、色々と大変になってきました。

☆吉澤美香（神奈川県横浜市）大阪の毒蜘蛛騒動で、不必要に蜘蛛が駆除されてしまうのではと、心を痛めます。



☆赤羽尚夫（神奈川県厚木市）自然に親しむ運動（県民対象行事、100人/回）

クモの話を主にした講師をしており、楽しいです。近くは9/30と10/15、オウギグモを訪ねて”秋のクモを見に”。

☆谷川明男（神奈川県鎌倉市）コガネグモ科のクモ類を分類学的に研究しています。コガネグモ科の標本でご恵与いただけるものがありましたらぜひよろしくお願ひいたします。特に雄の標本や、種名不明のものは大歓迎です。

☆新村 誠（神奈川県川崎市）イタリア旅行と重なってしまい残念ながら欠席します。高知合宿で勢いがついたので、トリや植物が忙しくなってしまいクモはちっとも進んでいません。ここいらで刺激が欲しいところなので是非出席したかったのですが……。年が改まったら、再度出直しますのでよろしくお願ひします。

☆及川照代（神奈川県秦野市）私のかよっているフィールド”蓑毛自然観察の森”にクモがたくさんいることに気付き、「クモのこと知りたいね。」という仲間の声で、学習会の講師を池田博明先生にお願いしたのが一年前、それ以来クモと友達になりたい！クモのこともっと知りたい！という思いで気軽に入会しました。行事にはできるだけ参加したいと思っております。ズブの素人ですが宜しくお願ひします。

☆浜岡史子（神奈川県秦野市）今年はみの自然観察の森でキジロオヒキグモを4ヶ月位の間じっくりと観察出来ました。比較的ポピュラーとのことですがこんなクモもいるんかと思って、興奮しました。5コも卵のうを作り、ずっと守り続け、卵のうが空になってもまだ守り、11月15日に確認したのを最後に、みえなくなりました。

☆池田博明（神奈川県足柄上郡大井町）学校が始まったので、授業の準備が忙しい生物部へ入るという男子が出現。それも2名！山北高始まって以来か。酒匂川河川敷のクモから調べたら、ゴマダラヒメグモが多数生息していました。

☆小野展嗣（東京都新宿区）9月、スイスのジュネーブの博物館で開催された第13回国際クモ学会議に宮下直さんと一緒に出席しました。3年に1度大いに刺激をうけて帰ってくるのですが、なかなか仕事に結びつきません。

☆梅林 力（東京都杉並区）特に変化はありませんが、毎日何かやっているうちに一日が終わってしまうというところです。クモの方では、ワスレナをかまっていますが、あまりしっかりした観察はしていません。しなければいけないと思っていますが……。もう少し計画的にしたいと考えています。が……。

☆小澤實樹（東京都世田谷区）クモにかかわる活動がほとんどありませんが、なんとかしようと思う毎日です。

☆利岡 匠（東京都世田谷区）しばらく蜘蛛の世界から遠去かっていましたが、最近、再び興味がわいてきました。

☆古浜 隆（東京都世田谷区）ヤボ用と重なり田無の採集・観察会に参加できず残念です。第4回目には何とか思っています。

☆中島祥吉（東京都町田市）くもに興味が戻ってきたら復活します。それまでは休会します。益々お元気で。

☆古川 渉（東京都武藏野市）例会・観察会等毎回欠席しておりますが、談話会通信・KISHIDAIA は毎号読んでおります。

☆生山 健（埼玉県川越市）現在、川越の雪印乳業技術研究所に勤めております。

☆野崎文江（埼玉県入間郡毛呂山町）ジョロウグモの観察をしています。今年は6月の低温で、からだが例年より8月頃まで、ちいさかったのですが9月から10月にかけて、高温が続いたので例年の体長になりました。特にメスは心配していたのですが体長が例年のように1.7cm前後になりました。近くの林の中にいるクモもよく育っています。目下家の中にもメスが巣をはっています。生殖も9月から10月（11月の上旬にも）にかけて順調のようです。今年も卵のうをと思っています。

☆加藤むつみ（千葉県千葉市）トゲグモの卵のうと子供迄の事はっきりさせて、VTR見ていただき、御意見いただきましたが、まにあいませんでした。卵のう、幼生、飼育（生態）に関して情報お持ちでしたらお教えくださいませ。

☆和仁道大（千葉県千葉市）9/30 水元公園でクモの観察会に参加。10/15 当会の田無演習林観察会参加。

☆長島 充（千葉県佐倉市）今年の8月～9月のシーズンはフィールドにしている雑木林でトリノフンダマシ属のオンパレード、トリフン、オオトリフン、シロオビトリフンの基本3種に加えてクロトリフンの♀まで出てしまいました。ついでにナゲナワグモの仲間もでないかと、期待し、必死で探しましたがそうはあまくなかったです。冬はクモ屋からトリ屋に変身します。春になつたらまたクモ屋にもどります。

☆松田まゆみ（北海道河東郡上士幌町）何かと忙しい夏も終わりデスクワークにとりかかり始めました。2年位前の採集品をようやく見たり、たまりにたまつた不明種の検討を始めたところです。

出欠のハガキをいただいた方々（50音順・敬称略）

（出）緒方 和、佐藤幸子、新海 明、新海栄一、鈴木茂生、浪波徳義、垂沢幸世
伴 満、宮下 直、安田明男

（欠）石川みどり、井野文雄、織茂尚子、藤井靖浩

去る'95年11月17日、会員の濱田龍一さんがお亡くなりになりました。事務局ではその濱田さんから、10月5日付けの消印で近況のおハガキを頂いておりました。それが残念なことに、生前最期のお知らせになってしまいました。謹んでご冥福をお祈りして、全文を掲載させて頂きます。

★濱田龍一（広島県福山市）福島の学会から帰ってみると岳父がまた緊急入院しているとのことで、さっそく見舞に行つたのですが存外元気なようで安心して福山へ帰りました。ところが次の日の夜はかなくなってしまい又博多へとつて返しました。「万物すべて終わりあり」と頭では承知していても、水曜日に話しかけた人が土曜日の夕方には石灰になっているのを見、歳はわずかに35しか違わないことと考えあわせると”俺も馬鹿ばっかりやっているわけにはいかないぞ”と考え込んでいます。

濱田龍一さんを偲ぶ

新海 明

昨年（1995年）の11月17日に広島県福山市在住の濱田龍一さんが急逝された。東京クモ談話会の会員ではあったが遠隔地にお住まいのため知る人は少なかったかも知れない。唯一、昨年夏に行われた四国高知県での合宿に参加されていたので、坊主頭で黒メガネ・ジーパンスタイルのいでたちの「あの人」といえば、「ああ」とわかる方もいるのではないか。

私はいつの頃からか、クモ学会でお会いするたびに酒席を共にすることが多く「明は～」とか「明が～」とか呼んで可愛がられていたような気がする。いつも首からタイマーを吊り下げていて、それが鳴ると「もう飲むのは止めて寝なくちゃ」などといいながらいなくなるのだが、暫くするとどこからともなく再び現れて横に座ってあれこれと話に加わり、時には隣で寝ていたりしていた。

高知での合宿ではずっと同じ部屋にいた。二日目の午後の自由時間を利用して安芸市での採集から戻り部屋に入ると、カーテンが閉められた窓際の椅子にすわった濱田さんが夕陽でシルエットのように浮かび上がっていた。「ああ、眠っているのだな」と思ったのだが、次の瞬間にふと気になりすぐそばに近づいて思わず寝息を確かめてしまった。なぜかその姿がはかなくもろかったような気がしたのだ。そして、余計な心配をしたものだと後悔しながら夕食の会場へ向かったことを思い出す。12月2日に兄からの濱田さんの訃報の連絡に接した際に、とっさに頭に浮かんだのはあの時の椅子に座っていた濱田さんの姿だった。信じられないと思うと同時に「やっぱり」という気持ちが入り混じった複雑な気分だった。

酔った濱田さんは饒舌となりいろいろな話をしていたが、昨年の春に八木沼先生が亡くなったときの通夜に行った際の失敗談（実際に通夜に行った方は濱田さんの姿は見てないでしょうが・・・）とか、福山にある「秘密のアジト」に置いてある仏像の話などを思い出す。「春になったら福山に遊びに行きますよ」と約束したのだが、今となっては叶わぬ夢となってしまった。昨夏の学会で発表した濱田さんご自慢の田んぼも見てみたかった。「この発表はクモの話じゃなくて、稻作りの話じゃないですか」などと悪口を言ったのも遠い思い出となってしまった。坊主頭にサングラス・腹巻きをしめ、片膝を立てて湯飲み茶わんで酒をあおっていた「ヤクザ姿」の濱田さん。そんな姿とは裏腹にやさしさと柔軟さをいつも潜ませていたような気がする濱田さんをもう見ることはできないですね。こんなにも早くお別れするとは思いませんでした。・・・本当に残念です。心からご冥福をお祈りします。

コスタリカ紀行（3）

平松 貴久

3. コルコバード編

3-1 咬まれたら30分である世行き？！

スコールもあがり、太陽が照り付けてきた。小峰氏とトレイルの入り口へ向かうと現地の人に呼び止められた。行ってみると木の枝にハチドリの巣があった。丁度お椀くらいの巣に白い卵が2個入っていたが、巣は木の葉にうまく隠れて外からはわかりにくい。さすが現地の人は目がいい（そうでない人もいるかもしれないが）と感心した。人が大体揃ったので熱帯雨林探検に出発。中は相変わらず薄暗く、蒸し暑い。先頭はガイドで鳥屋がそれにぴったりマーク、いうまでもなくクモ屋は最後尾といいたいところだが、池田、谷川両氏は先行してしまったようだ。筆者は途中を流れる小川の迂回路を塞ぐような大きな倒木のくぼみに、奇妙なクモの網を発見して落伍してしまった。水平円網の中心から垂直上方に1本の糸が伸びており、そこへ枠の方から出た数本の糸が付着していた。分布が中南米に集中しているヨリメグモ科のAnapis属らしい。ところがこのクモはやたら振動に敏感ですぐ下に落ちてしまひたった1頭しか採集できなかった。しかも他の場所にもいるだろうとタカをくくったのが間違いの元で他の場所では一切見つけることができず、見つけたらその場で採集という教訓を肝に銘じたのであった。やっと先行集団に追い付いたと思ったら何やら人が集まっている。見るとコガネグモ科のクモが木の葉にretreatを作り腹側を上にして潜んでいた。腹部腹面はオレンジ色、背面は金属光沢のある緑色の派手な色彩で、*Eriophora nephiloides*というクモであった（谷川氏同定）。葉は緑なのだから背を上にしていれば良さそうなものだが、これはあくまで人間の感覚であって腹を上にした方が隠蔽効果が高いのかもしれない。

そういうするうちに日が傾いてきた。とはいえるに限るものが目新しい物ばかりの一時はなかなか戻ろうとしなかった。するとガイドは「暗くなると、咬まれたら30分程で死ぬ毒蛇が出てくるから早く戻れ」と言い出した。単なる脅しとは思いつつやはり毒蛇には咬まれたくない。それにしても30分とは…。恐怖はその対象について無知だったり、姿が見えなかつたりすると增幅されるものだ。まして根が純情で人を疑うことを知らない筆者はこの「30分」にさして疑問を持たなかつたし、次の日それを目の当たりにし更にその恐怖の対象を文字通り肌で感じる人が現れようとは夢にも思わなかつた。この後尾のつけ根を負傷したコアリクイをガイドが捕獲、治療して逃がしてやつたらしいが、シャワーを浴びて部屋でくつろいでいたため見られなかつたのは残念であった。

夜になるとホタル屋（兼業クモ屋）の後藤氏の出番である。夕食もそこにロッジの庭を螢の光を追って走り回っていた。21時頃からクモ探検隊に参加した。先頭の川口いや谷川隊長が樹幹で脱皮中のウデムシを発見。初めて見るそのりりしい姿と脱皮したての鮮やかなクリーム色の体色に感動したが、直後に更に感動するものに巡り合つた。それは見たこともないクモの網で、葉裏の不規則網から4本の縦糸が下に伸びており、そこへあみ

郵便振込口座番号 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会

だくじのよう横糸が10本弱～10数本張られ、横糸と横糸の間に2～3本の粘球糸が縦につけられていた。粘球はライトに照らされて妖しく光り、網全体が風にたゆたう様はこの世のものとは思えぬほどの美しさであった。クモ自体は一見コガネヒメグモに似ており、コンペイトウ型の卵のうをつけていた。帰国後ある本でこの網の写真を見つけSynotaxus属と判明した。部屋へ戻ると隣のご婦人部屋から大蜘蛛が出て大騒ぎになった旨小峰氏より伺った。ハシリグモらしいとのことであったが、後日意外な正体が明かになる。

3-2月ヘビふんじゃった、紛蛇っ多、30分蛇踏んじゃった♪

翌7月30日は沖合のカーノ島探検隊とロッジ周辺の熱帯雨林探検隊の2班に分かれ、筆者は後者を選択した。ガイドは林内でしばしば立ち止まつて色々説明してくれた。ただし英語で。でも心配ご無用。名通訳池田氏のわかりやすい解説で一同言葉の壁に頭を悩ませることはなかった。つる植物や締め殺し植物が目立つ。後者は高木の幹に気根を巻き付けて生長しやがて基の木を枯死させるクワ科イチジク属の植物で、ガイドの説明では種ごとに受粉者のハチが特異的に決まっており、共進化 (co-evolution) の一例だそうだ。皮膚に毒腺があり、その毒をインディオが吹矢に塗ったことで有名なヤドクガエルが2種いてガイドが掌に乗せて見せてくれた。一方は緑と黒、もう一方はオレンジと黒で美しくいずれも体長約2cm。ヤドクガエルはパイナップル科植物に産卵し、孵化すると親がオタマジャクシを背負って生育に適した場所へ移動、親の未受精卵を食べて育つらしい。そしてついに「30分」君の登場である。しかも3回も！茶色い地色に黒の三角模様があり、みごとに枯れ草に紛れている。本名Bathros asper、クサリヘビ科である。1回目はガイドが最初に発見して皆興味深げに見入ったのだが、2回目は参加者最年少の某女性が知らぬ間に踏んづけていた。名通訳の父上に似て図太い彼女は（これ褒めてるつもりなんんですけど）事態に気付いた後も全く平然としていた。まさに「蛙の子は蛙」というべきか。「蛇に睨まれた蛙」どころか蛇の方がしっぽを巻いて退散してしまった。ちなみにこの「30分」君、その後人や場所によって、咬まれてから死ぬまでの時間が数分から数秒（そんなアホな！）とだんだん短くなりここに至って誰もがハッタリと気付いたのであった。

日本では見られない哺乳類や鳥類も幾つか見ることができた。山を降りて海岸線を望む道に出ると、ガイドの指差す方向の木の枝にハナジロハナグマがいたし、海岸線沿いの林ではウォーターアップルの実を食べていたノドジロオマキザルも観察された。猿が食べていないウォーターアップルの実を試食したが、歯触りはリンゴ、味はモモに似て美味で、程よい酸味が乾いた喉に快かった。妙な鳴き声がするので空を見上げるとベニコンゴウインコが5～6羽バタバタと飛んでいる。いつ見ても派手な鳥だが野生のものを見ると感動もひとしおである。この日は2時頃まで晴れていたが、だんだん雲行きが悪くなりロッジの近くまでついに雨が降り出した。そしてロッジに着く頃には土砂降りで皆食堂で一休みすることにした。コスタリカ大学で進化生物学や生態学を学んだというガイドのRudy氏を囲んで色々な話をした。英語が駄目なので自分の言いたいことがなかなか伝わらない

会費は単年度で

一般￥2,800

学生￥2,000

のがもどかしかったが、楽しいひとときであった。約1時間後カーノ島探検隊はしづく濡れで帰還したのは哀れだった。夕食後建物の壁に大蜘蛛がいるというのでクモ屋を中心として見に行くとアシダカグモぐらいのハシリグモといった印象であったが、帰国後谷川氏からハシリグモと思われたものは、目の配列から実はシボグモと判ったと聞かされたときは驚いた。ものの本によると彼等はカエルやときにはヘビも食べ、毒も比較的強いらしい。

3-3 キノボリトタテグモの一種発見

7月31日は小斑に分かれての自由行動である。前日の逆のルートで海岸沿いのコースをとることにした。海岸の岩場にBrassavola nodosa というランの見事な群落があり、白い花が美しかった。しかし日本なら盗掘され短期間で跡形もなくなるに違いない。筆者は安田氏と海岸付近で何か探すことにした。流木にサラグモ（田副女史によるとケシグモに近縁のこと）や紫色のトビムシがいる他はめぼしいものが見付からないので、砂浜で貝殻集めに没頭した。ヤシの樹幹のシロアリの巣をかきぶたでもとるように丹念にめくっていた安田氏が「トタテがいましたよ」と言って管びんを差し出した。見ると体長5mm程のトタテグモ幼体である。状況から推してキノボリだろうか？それから2人でそこら辺の木を探し回った。残念ながらその日は安田氏がもう1頭ほぼ同サイズの幼体を採集したにとどまったが、これが翌日の発見につながったのであった。

その夜消灯（9時）でベッドに寝転んでいるとホタルが光り出した。薺葺きの屋根から侵入したのだろうか？ゲンジボタルなどと違い明滅がはっきりしている。漆黒の闇に光るホタルは、かえって夜の闇を際立たせる。下の方へおりてきたので捕まえたところ後藤氏に見せられたばかりのPhoturis属の1種であった。肉食性で北米産のある種は雌が他種の発光パターンを真似て、同種の雌と誤認して飛来する他種の雄を捕食することで知られている。体色は黄褐色で全体にがっしりした印象であった。

コルコバードでの予定最後の8月1日はポートで国立公園のあるサンペドリージョへ移動。午前中の林内観察を終え、午後海岸で前日の雪辱に燃える安田氏とともに海岸の木を探していると高さ1.7 mのインディアンアーモンドの幹に住居を見つけ、直後に安田氏が反対側で見つけた。安田氏が住居をはがす時クモが飛び下りたが、黒褐色で体長2cmのキノボリトタテグモの一種雌成体であった（落花生の殻のような住居から判断してUmmidiaに間違いないと思う）。安田氏の執念が実った場面であった。

3-4 名残のコルコバード

ついにコルコバードを去る日が来た。ベランダに干したまだ乾かない衣類を取り込んでいる時だった。小峰氏が椅子に掛けたジャケットを着ようとして手に取った途端大きなサソリが現れた。気づかなかったら危なかったが見送りに出てきたような気がした。浜で予定通り遅れる舟を待つ間短いスコールがきた。あがった時海の彼方に虹がかかっていたのを今でも鮮明に覚えている。やがて舟が沖に姿を現した。

クモと潜水艦 ————— 二人のデーニツツ

笹岡文雄

とある調査の休憩時間、ご一緒させていただいた高橋登さんが、江崎悌三全集に面白い記載があると教えてくれました。

手渡されたその江崎悌三全集第2巻を見ると、「ドイツ海軍の潜水艦戦術の最高権威で（中略）Karl Dönitz 提督は彼の子息であったという。彼は日本に滞在中その夫人を同伴していたので、Karlは日本で生まれたのかも知れない。」(p. 92)とあります。

その彼 Wilhelm · デーニツツ (Wilhelm Dönitz, 1838-1912) はもともと解剖学者であり、1873年に東京医学校(後の東大医学部)に招聘されたいわゆる“お雇い外国人”的一人で、在任中に日本で多くの昆虫やクモを採集した人物です。私たちの間ではデーニツツといえば、すぐサラグモやハエトリグモに冠せられた名をすぐ思い出します。その人があのドイツ海軍のカール・デーニツツ元帥 (Karl Dönitz, 1891-1980)と親子関係の上に、日本で生まれていたとは初耳でした。あまりの情報に私は、さっそく事実かどうか調べて見ることにしました。

たまたまデーニツツの回想録の邦訳が、何年か前に出版されていたのを記憶していました。すぐに目録で調べると、「デーニツツ回想録 10年と20日間」(原題 10 Jahre und 20 Tage)とわかりました。前から読んで見たいものだったこともあって、さっそく本屋に注文し待つこと10日余。

やっと手にしたその著書を見て驚きました。それは何と1935年から「10年と20日」の間の戦時の回想録で、知りたかった肝腎の生い立ちを書いた物ではなかったからです。ただそれでもその本から、多少の成果も得られました。巻末の年譜によって、彼はベルリン郊外グリューナウ生まれとわかつたこと。さらにもう一つ、本の後書きによって彼のもう一冊の自伝「ドイツ海軍魂 デーニツツ元帥自伝」(原題 Mein wechselvolles Leben)が出版されていることがわかりました。

その本 자체はすでに絶版だったために、図書館を探すこと3つ。ようやく国会図書館で見つけたそれによると、彼の父はシェナのカール・ツァイス社の技師であり、来日の経験もありません。つまりKarlはWilhelm の息子ではなかったのです。

またその家系は農家であり、医者ももちろんのこと一定の職種を輩出しているわけではなく、海軍軍人も彼が一族で最初であったと書いています。

さらに「日本が西洋文明に対して鎖国を解いた後の1864年に、日本に最初に招聘された医学の大学教授の中に、デーニツツという名前も含まれていた。このデーニツツは後年、日本の天皇の侍医になっている。」(p. 1)とあります。恐らくWilhelm のことと思われますが、その彼が来日したのは1873年で、また天皇の侍医にもなっていません。ただお雇い外国人で天皇の侍医になった唯一の人に同じドイツ人のベルツ (Baelz, Erwin)がいて、彼もドイツ同志どこかで混同したのでしょうか。

思えば江崎とKarl、二人とも自分の専門外のところで、勘違いをしたのも何かの因縁でしょうか。
*参考文献：江崎悌三全集 全3巻 思索社。

デーニツツ回想録 10年と20日間 光和堂 1986.

ドイツ海軍魂 デーニツツ元帥自伝 原書房(絶版) 1981.

最後にこの文章を書くに当って、高橋登さんにそのきっかけを頂きました。お礼申し上げます。

「通信」原稿は 笹岡文雄へ 〒170東京都豊島区北大塚3-12-21

*採集観察会中間報告 第3回 1995年10月15日(日) 晴

参加者(50音順、敬称略)：荒金泰子、池田博明、市川哲雄、市川弥生子、泉千鶴、泉宏子、大川秀治、緒方和、小川敦央、尾口治子、柿沼智子、笠原喜久雄、加藤ななえ、加藤晴弘、加藤むつみ、木村知之、工藤泰恵、笹岡文雄、佐藤幸子、清水紀子、新海明、新海栄一、杉本喜亮、鈴木茂生、竹崎靖一、谷川明雄、千田高史、長井芳夫、中西章、中野隆雄、中村文夫、浪波徳義、平松毅久、深瀬徳子、福田英克、宮下直、安田明雄、和仁道大、ホド・ハンス・シリング(望人・翁主・士琳具) 以上39名

トタゲモ科	キシノウエトタテFM y
ジグモ科	ジグモF y
ハグモ科	ネコハグモF
ウズグモ科	マネキグモy カタハリウズグモy ウズグモy
ユウレイグモ科	ユウレイグモF e
ヒメグモ科	ツリガネヒメグモF y カグヤヒメグモy ヒメグモF y オオヒメグモF y e シロカネイソウロウグモy オナガグモm チリイソウロウグモy e フタオイソウロウグモy ヤホシヒメグモy カニミジングモF y シモフリミジングモF ヒシガタグモy バラギヒメグモy ムナボシヒメグモF
サラグモ科	ヘリジロサラグモy スゾグロサラグモF
センショウグモ科	センショウグモy
コガネグモ科	ハツリグモy キザハシオニグモy ビジョオニグモFM オニグモy カラオニグモy ナガコガネグモF コガタコガネグモF ギンメッキゴミグモF y ヤマトゴミグモF ゴミグモy ヨツテゴミグモm y トリノフンダマシF y e オオトリノフンダマシF e スズミグモy メガネドヨウグモy ドヨウオニグモy ワキグロサツマノミダマシF ジヨロウグモF f Mm y カラフトオニグモy
アシナガグモ科	コシロカネグモy アシナガグモy
ヒラタグモ科	ヒラタグモF y
タナグモ科	コクサグモFM メガネヤチグモy
キシダグモ科	イオウイロハシリグモF y e アズマキシダグモF y
コモリグモ科	エビチャコモリF フジイコモリy ハラクロコモリm ウヅキコモリy ハリゲコモリy アライトコモリy
ササグモ科	クリチャササグモy ササグモy
フクログモ科	コムラウラシマグモFM ウラシマグモf y
シボグモ科	シボグモy
エビグモ科	キンイロエビグモy キハダエビグモy ヤドカリグモF ヤマトヤドカリグモy シャコグモy
カニグモ科	キハダカニグモy クマダハナグモy ハナグモm オチバカニグモ sp. y コハナグモm ワカバグモf ヤミイロカニグモy
ハエトリグモ科	ネコハエトリy イワテハエトリy マミジロハエトリF y ウデブトハエトリy コジャバラハエトリy キレワハエトリy ヤハズハエトリy ヨダンハエトリF m y アリグモF デニツツハエトリM チャイロアサヒハエトリy イナズマハエトリy カラスハエトリy ムツバハエトリy 計87種
略号 F(♀成体) M(♂成体) f(♀幼体) m(♂幼体) y(性別不明幼体) e(卵)	
担当：宮下、笹岡(集計・笹岡)	

観察会中間報告追加と訂正

第1回 1995年5月14日

シャコグモにf、ヘリジロサラグモにfを追加、サラグモ科にハラジロムナキグモFを追加。したがって、記録数総計は103種となります。

また参加者のお名前、「成田ヨシ子」さんを「成田和子」さんにお詫びして訂正します。

会員移動 1995年9月上旬～1996年1月上旬

(住所変更等)

田中 徳久：〒244 神奈川県横浜市戸塚区鳥が丘12-4 ドルチェ戸塚116

稻葉 茂代：〒259-011 神奈川県中郡二宮町山西1181 エムハイツ105

谷川 明男：〒247 神奈川県栄区小菅ヶ谷3丁目29-29-203

畠守 有紀：〒576 大阪府交野市松塚7-9 金野方

新海 明：〒190 東京都立川市錦町3-12-16-1103

後藤 好正：〒221 神奈川県横浜市神奈川区羽沢町984 サンハイツ羽沢1-301

萩本 房枝：〒224 神奈川県横浜市都筑区荏田東2-4-8

久保田克哉：静岡県富士宮市小泉2024-1 県営住宅202

千田 高史：秋川市→あきる野市(表記変更)

(入会)

福田 英克：〒344 埼玉県春日部市一ノ割1-6-17-302

佐藤 理子：〒202 東京都保谷市住吉町1-6-5

(会員名簿訂正)

*住所

×

○

小笠原幸恵 名古屋市熱田区五本町 ⇒ 名古屋市熱田区五本松町

小澤實樹 東京都世田谷区赤堤 ⇒ 東京都世田谷区赤堤

*氏名

貞元巳良

⇒ 貞元巳良

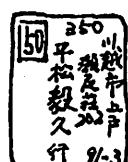
<お知らせ>

1996年度から会計担当が変わります。尚、今年度中の会計と新年度からの事務局は引き続き、平松が受け持ちます。

1996年度からの会計

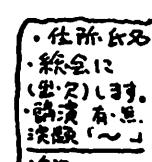
安田明雄 〒231神奈川県横浜市中区元町5-219 ☎045-641-0763

表



ハガキの書き方

86-(12)



裏

ハーバードオーネク 蜘蛛の世界 ◆13◆

普通にいるクモででき
る観察や研究の話など、
うとう最後にならまし
た。今日は珍しい種類の
話をします。

ひとつは投げ網クモで
す。このクモを網を張り
ます。この夜間、糸の先と大き
な結球を作ります。この
球を投げ網のよのくそん
ぶえ振の回して、逆に
たがふりひいて取りま
す。この球をひいたことが
あります。もし見ました
い経験はどうしてもお
おへトリニアごとく
じじが知り得ました。

ひとつは投げ網クモで
す。このクモを網を張り
ます。この夜間、糸の先と大き
な結球を作ります。この
球を投げ網のよのくそん
ぶえ振の回して、逆に
たがふりひいて取りま
す。この球をひいたことが
あります。もし見ました
い経験はどうしてもお
おへトリニアごとく
じじが知り得ました。

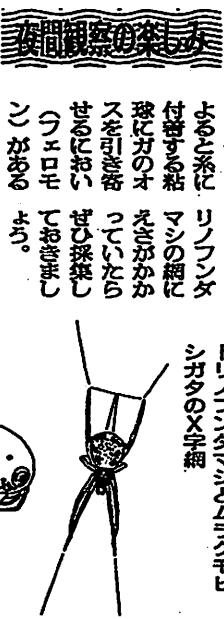
が、數年前に写真家の新

海栄さんにより、日本

のマメイタヤセキクモと
ムツトゲイセキクモが同



◆12◆



す。

日本最大のクモの固好
会、東京クモ専門会の夏
合宿で、衆しきは最も個性
的で、巣中寄れを上手
にみんなで夜の雜木林に
出かけます。田舎の中
に網が半ばくっつき、上
るだけではねりません。
尾間の葉の裏や枝の下に
かくれていて網羅が活路
な活動をし始めるので
す。大空飛ぶ生態を見
せてくれるものが多い
も体も大きくなり、腹部
の斑色も種の特徴がよく
国たつねどよめます。

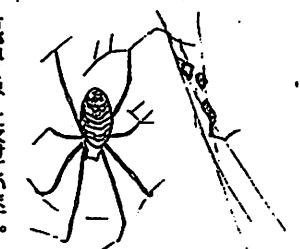
普通のクモのなかで
出で、一匹が食べられて
いるのを口からモモで
じょう。七月になると母
の体も大きくなり、腹部
の斑色も種の特徴がよく
国たつねどよめます。

ハーバードオーネク
蜘蛛の世界 ◆11◆



庭園の中
にあります。ここは
付着する結
球に力が入
ります。可憐な
花が咲いて
います。

（おわ）



ジョロウグモと網の目

珍しい生態に出会う
珍しい生態に出会う

方がある虫
と次第に進んで
る。これはいよいよ
の意味

あります。あるいは「これは、
この虫がこの虫を捕

まつ。今はまだ頭

を下にして、この虫が

ながつて頭を下にして、敵に歴代だと意識して

かわいいだけ」で、「かわいいだけ」で

あるのです。

（日本農業学会・池田博

樹木園芸会、山北高校教諭・池田博

宣した「世界の植物」

はいません

。オートバイで機

リックには、通行権を握

るが、何でかも

めの行動を

は不可視し

が思われます

賞し始めた
いもので
に近縁の種
類が日本に
いません
オートバイ
かいで機
リックには、通行権を握
るが、何でかも
めの行動を

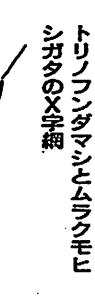
が、網の形
れました。
外植生では、網掛け
やえさの取り方が知られ
ないのですが、県内でも
モヤミヒジが地表を
めぐるほど多いことが
あります。もし見ました
い経験はきっとしてお
が、今後の圃場に現
を広げて定で持ち、枝上
象が巣立される可能性は
いたくあります。

（日本農業学会・池田博
山北高校教諭・池田博
明）

が、一時
より人糸に
付着する粘
球に力が入
ります。可憐な
花が咲いて
います。

（おわ）

トコトコした
ンガタのX字網



が、 もじで
ある人糸に
付着する粘
球に力が入
ります。可憐な
花が咲いて
います。

（おわ）

が、網の形
れました。



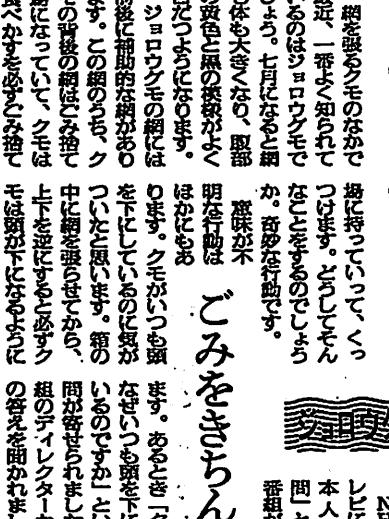
が、網の形
れました。この網の数は大体今
ないのですが、県内でも
モヤミヒジが地表を
めぐるほど多いことが
あります。もし見ました
い経験はきっとしてお
が、今後の圃場に現
を広げて定で持ち、枝上
象が巣立される可能性は
いたくあります。

（日本農業学会・池田博
山北高校教諭・池田博
明）

◆94.7.17

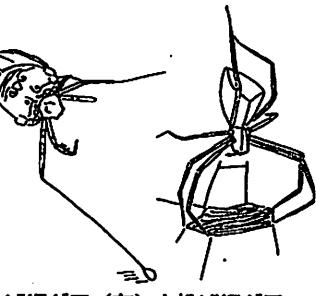
◆94.7.24

◆94.7.10



が、網の形
れました。この網の数は大体今
ないのですが、県内でも
モヤミヒジが地表を
めぐるほど多いことが
あります。もし見ました
い経験はきっとしてお
が、今後の圃場に現
を広げて定で持ち、枝上
象が巣立される可能性は
いたくあります。

（日本農業学会・池田博
山北高校教諭・池田博
明）



研究ノート

る。

長年私はクモの分類系統進化に関する問題を取り組んでいたが、よくて洞穴のクモに注目し始めたのが二十年ほど前である。これは私自身の研究問題を解く一つの方としての必要から、わがひとは各地で調査採集されたクモの名前の同定依頼をこうした人のひとの要求からである。

日本には多くの洞穴があるが、その洞穴にすむクモは、全体

たとえば、目の退化は長い歴史の結果とされるが、人工洞からも目の退化したもののが希見されである。このことは、洞穴侵入以前の長い落葉層や土壌間隙（がんゆき）などにおける生活の間に適応形質が形成されたのであるが、日本では最近この方では人工洞にあまり注目しないようであるが、日本では最近この方のみでないことを物語る。外国では人工洞にあまり注目しないようであるが、日本では最近この方で多くの小さな洞穴を持つ日本

洞穴のクモ ◆八木沼 健夫

として洞穴の持つ暗黒・多湿・一定のクモは多様性に富んでいる。温・無風という特徴環境に適応しに、歐米の大洞穴のクモはあまり其種の体側をそなえておらず、多様性を示していない。たゞ日本でも、洞穴ごとに環境と無関係な

体制の変化を示している。したがて洞穴性のもの適応の由来と洞穴環境によりて生じた形態的部分的変化などの進化の問題がある。

一般に洞穴への適応性は長い洞穴生活の結果と考えられるがちであるが、事実は必ずしもそうではない。小きい洞穴へ侵入したクモの場合は小さく、大きい洞穴へ入った大の関心がよせられた。多くの人々が驚異の目を凝らし、多くは、今後さらに変化を続けていくであろう。各地の洞穴のクモをなめて、二十年の歴史を持った古い洞穴をするものと同じ体制の集團は大きい。つまり小虫類が離れた場合遺伝子の消滅が起るものだが、じく新しい人工洞（廢坑）にも見られるのをも見かけ、形質の変化が起こる。

[1971.12.23. 24]

「耳が痛い」
中にクモが
いていた
アメイバ
の虫食い
で耳が痛
くなっていた

「耳が痛い」
の中に「妊娠した」と
モ�이だらなかった。
クモが壁面に虫を捕まえた
ときに、手を離して
手が耳に当たって
耳が痛くなってしまった。
（ローラー）

朝日新聞 93.4.13
猪原圭三郎さん提供

米露のバトーハスを導入へ

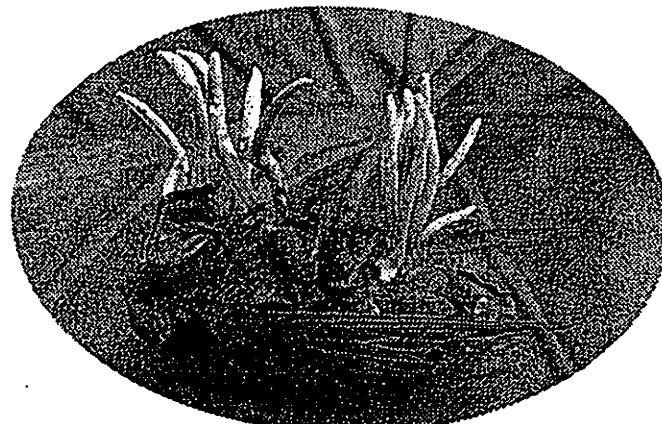
コヒラグヒラ・種 *Paroedura rufa*
ulosaは小形のラクレット、木造に付く
ところ。カリツィル:「アヒト調査し
たところ、おじな海はミニアーバー
の一種、セスジヤフカ、ハズムシ
の一種の二つだった。そして、この
クモの胃の内容物を調べてみたら、
何の遊び方はランダムでもなく、
一つの種に特有するものもなく、…
つを均等に近く割合でとっている
といふものであることがわかった。
」このクセの〇種類の必須アミ
ノ酸がどれだけ、どの量に含まれ
しているかを調べ、それと何の遊び
方を合わせてみると、ほぼクモ
の体のアミノ酸組成と一致して
いた。また、他の実験から、種類
の別のみを与えていたクモによ
り、複数の種類の餌を与えた
クモの方が生存や繁殖においてよ
る」とがわかった。筆者は、「こ
からのことから採餌行動においては、
カロリーのみでなく栄養も大切だ
と言える」。
（猪原圭三郎）

『クモのはなし』(技報堂出版)の「クモのメニューの量と質」(池田)に既に出て
います。紹介は、こちらが(アニマ)先です。川原嘉昭の「入門動物の行動」(岩波書店)
にも記述あり(ikeda註)の方

アニマ'80.6 no.87
p.92 短報
503.

No. 86 付録3

セミ成虫から出た冬虫夏草 沖縄・西表島に集団発生地



セミの成虫から出たイリオモテクマゼミタケ。
集団発生が確認された。柄の長さは約2cm
= 6月15日、西表島のアイラ川沿岸で

密林で、新種も研究者ら 見つける

昆虫だから生じる不思議なのが、冬虫夏草（とうちゅうかくそう）。幼虫から生じるものほとんどが、セミの卵（成虫）から出た極めてまれな冬虫夏草の集団発生地が、沖縄県の西表島で見つかった。菌類研究者や同好者らでつくる「日本冬虫夏草の会」（清水大典会長、会員百二十六人）が先月、同島で実施した初の組織的調査でわかつたもので、同時に新種セミの幼虫、ハチ、クモ、ハエなどからでた計十七種類、二百個体以上を確認した。同調査で一度にこれほど多様で大量の発見は例がないところ。

調査は同会の日本菌学会会員ら十一人、地元自然研究会員らが参加、四日間、浦内川、仲間川、シイラ川、アイラ川沿いで実施した。亜熱帯原生林の中、シダ類の生い茂る林床ひざをつき、サキシマハブやヤマビルを攀登しながら、数々から数種の生き残った冬虫を追む作業が繰り返された。死んだセミの卵から出た冬虫

冬虫夏草、虫卵などに寄生するきのこの絲状で、分類は子の兩類バッカクキン科に属する。名前のもとだ。中国でコウモリガの幼虫（イモムシ）に生じるきのこがそう呼ばれていたことから名づけられた。世界に三百五十種、日本では、その三分の一以上の種類が知られ、特に多い。中國では薬の料理に使われていて。

調査は同会の日本菌学会会員ら十一人、地元自然研究会員らが参加、四日間、浦内川、仲間川、シイラ川、アイラ川沿いで実施した。亜熱帯原生林の中、シダ類の生い茂る林床ひざをつき、サキシマハブやヤマビルを攀登しながら、数々から数種の生き残った冬虫を追む作業が繰り返された。死んだセミの卵から出た冬虫



調査を支える裏方であり、より自然が残されているかどうかを見る指標的。国内でも珍しい原始の自然がここにあることを改めて示している」と清水会長。しかし、同川では現代、農地がんがいとりゾート開発を見越したダム建設計画が進行中。調査に参加した沖縄大学の自然科学専攻、大畠哲雄教授は「足元にこじらした苦痛があるとは知らないかった。保護を訴えていきたい」と話していた。